

令和5年 12月25日	病害虫発生予報 1月号	茨城県病害虫防除所
----------------	------------------------------	-----------

農薬保管庫や防除器具の点検・整備を行いましょう！

＜ 目 次 ＞

I. 今月の予報	
【注意すべき病害虫】	
イチゴ：ハダニ類	1
促成トマト：黄化葉巻病（タバココナジラミ）	1
【その他の病害虫】	
イチゴ、促成ピーマン、促成キュウリ	2
○イネ縞葉枯病対策のため、ヒメトビウンカの越冬量を減らしましょう	2
○水稲におけるスクミリンゴガイの冬期防除対策について	3
○施設野菜での灰色かび病の発生に注意しましょう	4
【防除所レポート】	
令和5年産大豆子実の主要病害虫による被害状況について	5
令和6年版果樹病害虫参考防除例について	6
II. 今月の気象予報	
	7

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの
「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。Tel :0299-45-8200

ホームページでは病害虫・フェロモントラップ・農薬関連情報をご覧いただけます。

<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>



※病害虫の発生状況や、適切な防除方法は地域により異なる可能性があります。病害虫の防除や農薬についてのご相談は、お住まいの都道府県にある病害虫防除所等の指導機関にお問い合わせください。

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 12月中旬現在、寄生葉率（本年値 22.0%、平年値 14.3%）、発生地点率（本年値 100%、平年値 61%）ともに平年よりやや高い～高い。
- ② 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は増殖が速いので、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
- ③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

促成トマト

1. 黄化葉巻病（タバココナジラミ）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 12月中旬現在、黄化葉巻病の発病株率（本年値 0.7%、平年値 0.1%）、発生地点率（本年値 22%、平年値 1%）ともに平年より高い。
- ② 12月中旬現在、一部圃場でタバココナジラミ成虫の発生を認めている。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病株は見つけ次第抜き取り、適切に処分する。
- ② 媒介虫であるタバココナジラミの施設内への侵入および施設外への飛び出しを防ぐため、開口部に 0.4mm 目合い以下の防虫ネットを設置する。破損がある場合は必ず補修する。
- ③ 黄色粘着板や黄色粘着テープを施設内や周辺部に設置し、タバココナジラミ成虫を捕殺する。
- ④ タバココナジラミは多発すると防除が困難となるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ⑤ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑥ 耐病性品種もトマト黄化葉巻ウイルスに感染するため、タバココナジラミの防除は感受性品種と同様に行う。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況および注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量: やや少ない	12月中旬現在、平年よりやや少ない発生である。
	アザミウマ類	発生量: 平年並 ～やや多い	12月中旬現在、平年並～やや多い発生である。
促成ピーマン	黄化えそ病	発生量: 多い	12月中旬現在、平年より多い発生である。発病株はただちに抜き取り、適切に処分する。媒介虫であるアザミウマ類の防除を徹底する。
	うどんこ病	発生量: やや少ない	12月中旬現在、平年よりやや少ない発生である。
	斑点病		
	アザミウマ類	発生量: 平年並	12月中旬現在、平年並の発生である。
	コナジラミ類		
ハスモンヨトウ	発生量: -	12月中旬現在、一部圃場で発生を認めている。	
キュウリ 促成	べと病	発生量: 平年並	12月中旬現在、平年並の発生である。

イネ縞葉枯病対策のため、ヒメトビウンカの越冬量を減らしましょう。

次作のイネ縞葉枯病の発生を少なくするためには、ウイルスを保有したヒメトビウンカの越冬量を減らすことが重要です。

気象庁の3か月予報によると、1、2月の気温が平年より高いと予想され、ヒメトビウンカの羽化時期や越冬場所からの移動時期が早くなることが予想されます。また、暖冬により越冬量が多くなる可能性も考えられます。

水田内や畦畔、土手等のイネ科雑草は、ヒメトビウンカの越冬場所となります。畦畔、土手等の除草を行うとともに、水稻収穫後にまだ耕起していない水田がある場合には、速やかにすきこみを行い、ヒメトビウンカの越冬量を減らしましょう。



水稻におけるスクミリンゴガイの冬期防除対策について

スクミリンゴガイ（通称ジャンボタニシ）は南米原産の淡水巻貝の一種で、田植え直後の軟らかい水稻苗を食害し、茨城県内においても一部の水田圃場で発生が確認されています。本種は土中に潜って越冬することから、圃場内の越冬密度を下げる対策が重要です。特に、暖冬の年は越冬する個体数が増加傾向となることから冬期の耕うんを行い、次作の発生を抑えましょう。

[特徴]

成貝は殻高が2～7cmで、稲や水路の壁等にピンク色の卵塊を産む。寒さに弱く、越冬個体は地表からおおむね深さ6cm以内に分布している。また、水路を伝って拡散・定着し、水路に隣接する圃場では取水時や大雨の浸冠水時等によって圃場に侵入する。

[次作に向けた対応]

- ① 1～2月の土壌が乾燥して固い時期に、トラクターの走行速度を遅く、ロータリーの回転速度を速くし、土壌を細かく砕くように耕うんすることで、越冬個体を物理的に破砕するとともに低温の外気にさらす。複数回行うと効果が高まる。
- ② 本種未発生の圃場へ越冬個体の持ち込みを防止するため、使用後のトラクターを洗浄し、付着した泥を落とす。
- ③ 発生が多い圃場に隣接する水路や本種のピンク色の卵塊を確認した水路においては、1～2月に泥上げを行い、越冬場所をなくすと同時に越冬個体を低温の外気にさらす。
- ④ 水路の泥上げは地域全体で行うと効果が高まる。また、掘り上げた泥は、未発生圃場に持ち込まない。



施設野菜での灰色かび病の発生に注意しましょう。

灰色かび病は、野菜、花き、果樹など多くの作物を侵す多犯性の病害です。本病の病原菌の発育適温は23℃位であり、湿度が高く、曇天が続くと、発生しやすくなります。また、まん延が速く、多発生すると防除が難しくなるので発生初期からの防除が重要です。

施設野菜では、平年並の気象であれば、2～3月に発生が増加し始めますが、暖冬等の影響で気温が高い場合や曇雨天が多い場合は、平年より早い時期から発生する傾向があります。これは、暖房機の稼働時間が短くなり、ハウス内の湿度が上昇することが一因と考えられます。

気象庁の3か月予報によると、1、2月の気温が平年より高く、平年より晴れの日が少ないと予想されるので、灰色かび病の発生に注意しましょう。

〔防除上注意すべき事項〕

- ① 多湿条件で発生しやすいため、整枝、暖房、送風、換気等によりハウス内の湿度を低く保つ。
- ② 幼果に残った花卉や、罹病部はできるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 薬剤散布は、晴れた日の午前中に行う。また、曇雨天が続いて薬液が乾きにくい場合は、くん煙剤を利用する。

※農薬を使用する際は、ラベルに記載されている使用基準、注意事項を必ず確認のうえ使用する。

令和5年産大豆子実の主要病害虫による被害状況について

令和5年産大豆子実の主要病害虫による被害状況と防除対策をまとめました。次作に向けた対応の参考にしてください。

【被害状況】

病害では、紫斑病、べと病の被害粒率は平年並、ウイルス病の被害粒率は平年よりやや高くなりました。虫害では、吸実性カメムシ類、マメシクイガによる被害粒率は平年並でした。

表 令和5年産大豆子実の主要病害虫による被害状況

病害虫	被害粒率 (%)			発生地点率 (%)		
	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾
紫斑病	0.3	1.6	8-9	46	60	7-9
べと病	1.6	4.4	8	85	62	2-4
ウイルス病	1.9	0.9	3	69	30	2
吸実性カメムシ類	2.5	2.7	6	100	79	1-2
マメシクイガ	2.0	2.2	6	62	53	3-5

1) 平年：過去10年間（平成25～令和4年）の値の平均値。ただし、べと病は平成29年を除外した過去10年間（平成24～令和4年）の値の平均値

2) 順位：本年を含む過去11年間における本年値の順位。ただし、べと病は平成29年を除外した本年を含む過去11年間（本年および平成24～令和4年）における本年値の順位。（8-9は8位から9位まで同じ数字であることを示す）

【調査圃場】 県内13地点の大豆圃場（里のほほえみ9圃場、納豆小粒4圃場）

【調査方法】 1圃場あたり10株の上位20莢程度（合計200莢程度）を採取し、子実の被害を目視で調査した。

【採取時期】 令和5年10月第4、5半旬、11月1半旬

【防除対策】

＜紫斑病＞

- ① 茎葉を含む被害残渣は適切に処分し、被害が多発した圃場では連作を避ける。
- ② 種子更新を行う。
- ③ 防除適期は開花期の20日後頃である。
- ④ 開花期から成熟期までに連続した降雨がある場合は、開花期の30日後に追加防除を行う。2回目の防除を行う際は、1回目の薬剤とFRACコードの異なる薬剤を散布する。
- ⑤ 収穫が遅れると発生が多くなるので、適期に収穫する。

＜べと病＞

- ① 茎葉を含む被害残渣は適切に処分し、被害が多発した圃場では連作を避ける。
- ② 種子更新を行う。
- ③ 密植を避け、風通しを良くする。
- ④ 防除適期は開花期～子実肥大期である。
- ⑤ 発病程度は品種間差があり、「里のほほえみ」は「タチナガハ」に比べて発病しやすい傾向にあるので、発病初期からの薬剤防除を徹底する。

＜ウイルス病＞

- ① 種子更新を行う。
- ② 生育初期にウイルス病に感染すると被害が大きくなることから、媒介虫であるアブラムシ類を早期に防除する。
- ③ 発病株は早い時期に抜き取り、処分する。

＜吸実性カメムシ類＞

- ① 薬剤防除は莢伸長期以降、発生に応じて7～10日ごとに複数回行う。
- ② 幼虫も子実を加害しながら成長するため、幼虫の発生状況にも注意する。

＜マメシクイガ＞

- ① 成虫の移動性が低く発生圃場で繁殖・越冬するので、連作を避ける。
- ② 防除適期は産卵最盛期～その約10日後であり、大豆の生育ステージとしては、莢伸長終期～子実肥大初期頃にあたる。

令和6年版果樹病虫害参考防除例について

果樹は栽培期間が長く防除体系が複雑です。果樹の病虫害防除は、病虫害の発生生態や発生状況をふまえて、効果的な防除時期や薬剤を選定して、体系的に行っていく必要があります。病虫害の薬剤耐性・抵抗性への考慮も必要です。茨城県果樹病虫害参考防除例編成会議では、県監修により果樹病虫害参考防除例（以下、防除例）を6作物7種類作成し、農薬適正使用および効果的防除を推進しています。

令和6年版防除例の主な変更点を以下にまとめました（表）。防除例を利用する際には、変更点に十分注意しましょう。過度の農薬散布を防ぎ、農薬による危被害のリスクを下げるためにも、冬季の落葉処理や粗皮削り等の耕種的防除技術を活用し、また発生予察情報や圃場での病虫害発生状況を十分確認して、必要に応じた防除を行いましょ。

表 果樹病虫害参考防除例の主な変更点（薬剤の追加・削除等があった箇所）

令和5年版

品目	時期・記載場所	薬剤名等	変更の種類	変更理由
露地赤ナシ 無袋	7月中旬 本欄	アンビルフロアブル	薬剤の変更	①
カキ	注意事項欄 (新梢伸長期)		薬剤の追加	②
	注意事項欄 (新梢伸長期)		薬剤の追加	③
クリ	注意事項欄 (幼果期)		薬剤の追加	④
リンゴ	6月中～下旬 本欄	ダニゲッターフロアブル	薬剤の変更	⑤
	注意事項欄 (7月上旬)	ダニサラバフロアブル (カネマイトフロアブル)	薬剤の変更	

令和6年版

変更後 〔変更後の登録内容〕
ミギワ20フロアブル
フェニックスフロアブル
コルト顆粒水和剤
ベルクートフロアブル
ダニサラバフロアブル
ダニゲッターフロアブル (カネマイトフロアブル)



※表に記載した令和6年版の果樹病虫害参考防除例は、令和5年10月1日現在の登録内容に基づいて作成しています。

変更理由は以下のとおりです。

【露地赤ナシ無袋栽培】

- ① 7月中旬の黒星病防除について防除効果を高めるために、薬剤の一部をミギワ20フロアブルに変更しました。

【カキ】

- ② 注意事項欄にヒメコスカシバ対策の記載を加え、フェニックスフロアブルを追加しました。
③ 注意事項欄にフジコナカイガラムシ対策の記載を加え、コルト顆粒水和剤を追加しました。

【クリ】

- ④ 注意事項欄にクリ実炭疽病対策の記載を追加し、ベルクートフロアブルを追加しました。

【リンゴ】

- ⑤ 6月中～下旬のリンゴハダニ、ナミハダニ防除について、薬剤をダニサラバフロアブルに変更しました。また7月上旬の注意事項欄に記載しているリンゴハダニ防除については、薬剤をダニゲッターフロアブルに変更しました。（この2剤の本欄と注意事項欄の記載を交換しました。）

【露地巨峰】、【雨よけ巨峰】、【ウメ】では薬剤の変更はありません。

なお、農薬の登録内容は変更になる可能性がありますので、農薬使用時には必ずラベルおよび登録変更に関するチラシ等を確認して適正に使用して下さい。

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 12月23日から1月22日)

気象庁(12月21日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	10	30	60
降水量	関東甲信全域	30	40	30
日照時間	関東甲信全域	30	40	30

[概要]

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<1週目の予報> 12月23日(土曜日)から12月29日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率50%

<2週目の予報> 12月30日(土曜日)から1月5日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率80%

<3週目から4週目の予報> 1月6日(土曜日)から1月19日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類(FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。